

## 20 世紀後半の外来語使用急増の一過程 —外来語「パターン」の増加過程を例に—

石暘暘

20 世紀後半の日本語において抽象的な外来語が急増することが指摘されるが、その具体的な増加過程については、まだ明らかになっていない部分が多い。本発表では、まず「パターン」の増加過程を検討する。そして、類似の変化が見られる語も取り上げて、20 世紀後半の抽象的な外来語使用の増加に、どのような過程の変化があったのかを探る。

「パターン」は借用初期に「型紙」「図案」という具象的の意味で、洋裁・テレビ放送の分野に限り用いられた。だが、1970 年代から、「一定の決まりを持った繰り返しの型」という抽象的の意味が急増し、経済・政治の分野等、一般的に用いられるようになった。この抽象的の意味の登場によって、「パターン」が急増し、一般化した。

「パターン」と類似する変化は、「ポイント」「イメージ」にも見られる。「ポイント」は借用初期に「転轍機」「活字の大きさの単位」という具象的の意味で、鉄道・印刷の分野に限られたが、1960 年代頃から「要点」という抽象的の意味が急増し、スポーツ・外交の分野等、一般的に用いられるようになった。また、「イメージ」は借用初期に「物事の具体的な映像」という意味で、文学や新聞の文化面に限られたが、1960 年代から「物事の典型像」という抽象的の意味が急増し、政治・経済の分野をはじめ一般的に使われるようになった。これらの語はいずれも借用初期の具象的の意味からかなり離れた抽象的の意味に変化し、「意味の断絶」があるといえる。また、使用分野も借用初期の専門用語から経済・政治などの幅広い分野に変化し、「使用分野の断絶」もあるといえる。つまり、3 語とも、急増した抽象的の意味は、借用初期の具象的の意味との間に、意味・使用分野における断絶が存在している。このような変化は、おそらく日本語内で生じたものではなく、原語からあらためて抽象的の意味を借用しなおしたもので、すなわち「再借用」と思われる。

このように、1960・70 年代に原語からの抽象的の意味の「再借用」が起こったと考えられる。そして、このことは、20 世紀後半の抽象的な外来語使用の急増の一過程ととらえられる。